

令和 5 年 度
宮崎国際大学 教育学部
指定校推薦

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

問題

次の文章は、細胞生物学者で歌人でもある ^{ながたかずひろ}永田和宏さんが、親が子どもと会話（対話）をする場合、どのようなことに心がけるべきかについて述べたものです。永田さんの意見を要約するとともに、それを踏まえた上で、あなたが先生になったとき、教育の場における子どもたちとの会話（対話）は、どうあるべきだと考えるか、600字以内で述べなさい。

親が子に対するとき、子どもが何か言うと、すぐさまそれを否定ないしは無視してしまう親は結構いるものだ。「そんな愚にもつかない空想みたいなことを考えてないで、早く勉強しなさい」なんて、思い当たる親も少なからずいるだろう。

そんな反応が、子どもの可能性を無為に摘み取ってしまっていることに、ほとんどが気づいていない。親として、子どもの言うことの是非を判断して、正しい方向性を示しているつもりの親が断然多いが、適切な判断と、子どもが自分の才能あるいは可能性に目を開かれることの重要性を較べてみれば、どちらが子どもの将来にとって大切であるかは、あらためて言うまでもあるまい。

子どもが思い切ったアイデアや思いつきを口にして、親がそれに否定的に反応する場合、多くはそれが無理だと判断することからくるのだろう。やってもきっと失敗する、挫折も味わうかもしれないし、第一、そんなばかばかしいことに費やすのは時間の無駄であると判断する。

しかし、子どもや若者には失敗経験こそが必要なのである。挫折も経験したほうがいい。なによりまずいのは、まだやりもしないで、それが無駄と言われてやる気をなくしてしまうことである。実行しないであきらめるよりは、実行して失敗を経験するほうが、はるかに有意義な時間となるはずである。

実際に実行するまで行かなくとも、子どもが考えたことを思考実験として推し進めるように誘導することも大切であろう。ある思いつきを話したら、「それで、次はどうするの？」と話を次に進める。一つの思いつきから、次のアイデア、手順、経路などなど、さまざまの可能性について、彼自身が考えを進められるように背中をおしてやるだけで、自らものを考えられるという自信を持つことができるものであり、さらにそれが例えば親に褒められたりすることで得る自信こそが、成功体験と同じような効果を持つはずなのである。

親はおだて上手であることが、必須であると思っている。日常のちょっとしたおだてが積み重なることによって、子どもの可能性の開き方は大きく影響を受けるはずである。

意見を言わずに、じっと相手の言葉に耳を傾ける。すぐに何か言ってしまいたくなるものだが、それを辛抱して聞き続け、相談する相手の一歩上からものを言おうとしないこと、これはしかし、思っている以上に難しいことではある。

難しいことではあるが、まず、相手の言葉に寄り添いながら、海拔ゼロメートルの位置か

ら、可能性の最大値を考えてみることに、そんな自らの思考傾向の意識化こそ、若い世代の可能性をいっばいにまで延ばせる、あるいは開かせる契機があると言ってもいいだろう。

(永田和宏『知の体力』による・一部省略がある)